

留学生・日本人学生・地域社会三者間異文化交流における大学の役割

鹿児島大学留学生センター教授 小林 基起

はじめに

鹿児島大学生涯学習教育研究センターが地域社会との連携が不可欠のように、鹿児島大学留学生も地域社会との連携が不可欠である。留学生は地域社会のあたたかいご理解なしには日常生活すら満足にはおくれられないのである。

鹿児島大学留学生センターでは留学生への教育・研究が円滑に進むように、日本語・日本事情および相談業務を行っているが、それだけでなく地域社会との融和・連携も重要な課題として取り組んできた。以下に述べる「多国籍合宿」「カントリートーク」などもその例である。

生涯学習教育研究センターと留学生センターとは、地域社会との連携の必要性和重要性とを共有し、相互補完的役割を担っている。両者の役割が重なる部分について、互いに積み上げたノウハウや知見を共有しなければならない。

(1)鹿児島大学留学生をめぐる現状

鹿児島大学留学生は40数カ国約310名強(07年5月)がいるが、2000年10月の留学生センター発足時、留学生と日本人学生との日常的接触は少なく、双方ともにより深い接触を望んでいた。異文化への興味は抱きながらも、言語や習慣の違いへの不安や、相互理解は簡単ではないだろうとの思い込みから、継続的な交流は十分ではなかった。

同様のことは地域社会との交流においても顕著であった。個人や団体や行政ともに単発的なイベントは行っても、継続的で日常的な交流は不十分であった。留学生の活躍は地域社会の活性化にとっても重要であり、多角的な取り組

みが期待されてきたが、表面的にうまくいけばいいという姿勢から、継続的で深い交流までにはいたっていなかった。

このような状態を打開するため、鹿児島大学留学生センター指導部門では「多国籍合宿」を毎年実施し、今年(07年)で第七回目となった。

多国籍合宿をはじめるとあたっての準備は、KUFSA(鹿児島大学留学生会)の活性化、日本人学生による留学生サポート組織の立ち上げ、地域による外国人への理解と援助の獲得への努力など、いずれも根気のいる作業の連続であった。しかしそれらの作業の積み重ねの中で、留学生も日本人学生も、また地域住民も着実に何かを学びつけて成長し、相互理解と国際交流の真の意義に気づいていった。その道のりは平坦ではなかったが、成果も挙がってきた。

振り返って感じることは、留学生、日本人学生、地域社会ともにエネルギーに満ちているということである。そのエネルギーを集約し発揮できる場を用意できれば、面白さに目覚めて自ら動き出す。そのきっかけ作りに大学の果たす役割は大きいのである。以下、経緯について概略を記す。

(2)「多国籍合宿」について

「多国籍合宿」と称する留学生と日本人との大規模な宿泊研修会に結集された知恵と時間とエネルギーには膨大なものがある。

その第一回目は2001年5月19日(土)から20日(日)まで一泊二日、鹿児島大学留学生センターおよびKUFSA主催で行われた(於 県立青少年研修センター)。



07年 多国籍合宿全体集合写真

留学生約40名及び日本人学生と地域住民約60名、計100名を超える人々が参加した。実施にあたり他大学や日本語学校の学生・卒業生、地域住民など、日ごろから留学生に関心を持ちサポート活動を行ってきた方々をはじめ、初めて外国人と接する方まで実に多くがボランティアとして準備段階から参加した。そして意義ある多国籍合宿するにはどうすべきかを、忙しいなか夜間に何度も集まり討論を重ねた。討論には当然留学生も参加するので、使用言語ひとつをとっても英語や中国語になったり、また日本語に戻ったり、通訳もいつも居るとは限らず、コミュニケーションをとることが容易ではない現実に直面した。この忍耐力の必要な手間のかかる相互理解の作業の積み重ねのなかで、異文化理解や多国籍合宿のはらんでいる面白さと困難さに具体的に気づきはじめ、分科会やプログラムの進め方のノウハウを各人が少しずつ理解し身につけていった。

留学生にとっては研究室での専門日本語や教室日本語を超えた生きた日本語・日本文化の修練の場となり、日本人にとっては外国人に理解できる日本語の訓練が必然的に課され、毎回の会議は言語と異文化への認識を新たにできる機会となった。外国人は英語ができるとは限らず、できてはわかりづらかったり、英語の通じない外国人との相互理解のためにはその国の文化の理解が必要だったり、日本語を用いても対話にはどのような配慮が必要かという学習が無意識のうちに行われ、日本語や日本文化のありようを考える契機となった。

このようなコミュニケーションの困難さは多くの日本人には初体験であったが、このことが留学生を取り巻く大学や日本社会に日常的に存在している外国人への無理解の現実を気づかせる契機となり、異文化理解の容易ではないことを体感することとなる。日本人のみで語っている国際理解や異文化理解が、どんなに留学生や外国人を無視しているかを知るのである。コミュニケーションをめぐる困難さは、分科会などでも同様に繰り返されることが予想され、

それへの対処が新たな課題となった。

いま気づいたばかりの自分の無理解を、今度は新たな参加者にどのように理解してもらうのかという難問を、具体的な分科会などで、ひとりひとりが解決する道を探してゆかねばならないのである。しかし、何よりも多国籍合宿を実施する必要があるという動機の強さがすべてのスタッフの前提にあった。

40数ヶ国約300名の鹿児島大学留学生は、自国のことや来日以来の積み積もった心情（表面的な国際交流のイベントで人寄せパンダ扱いをされてきたことへの苛立ちと、真の相互理解を求める気持ち）を日本人に伝えずにはいらなかったし、日本人は外国人の本当の気持ちを知らなかったのである。双方ともに理解しあえる真の友人が欲しかったのである。互いに学びあおうという姿勢が自己主張の以前にあり、多国籍合宿はたまっていたエネルギーを結集するよい機会であった。

さて、実施にあたっての十数回の会議では、「留学生へのサポートのあり方」をテーマに、単発的なものに終わらせないための知恵を出し合い、7つの分科会と全体会2回、夕食後の多文化音楽と舞踏の夕べ、多種目のスポーツ交流が企画された。留学生は17カ国42名の参加があった。

中南米やアジア・アフリカ諸国等、17カ国の留学生には文化と宗教や価値観の多様性が当然のことながら存在する。日頃は遠慮して自らの意見を主張しようとはしない留学生も、前後左右を見、参加者の人柄とやりとりを見定めながら安心してくると、だんだんと自身の本音を主張しはじめる。主張し始めると17カ国いけば17通り、同国人内部でも同じ意見とは限らないので、実に多様な意見が出て興味深い。それが論議を深めてゆくにしたがい、だんだんと意見が集約されてゆく。異文化相互が歩み寄っていくのである。もちろん日本人との意見の相違もあるが、それらもいずれは集約されてゆく。その過程が異文化交流の醍醐味なのであるが、そのおもしろさを共有することの意義



深さを参加者は体験する。

特筆すべきは、異文化間の価値観の相違による意見の対立と討論の場に、日本人学生と地域住民が参加し、異文化交流の臨場感を共有できたことである。異文化間の共存・共生の困難性を具体的に知ることとなり、それゆえ共存・共生の重要性をあらためて認識してゆく過程を実感する。

「多国籍合宿」はこのおもしろさに気づいた故であろうか、夜を徹して語り合うグループが多数でき、翌日のスポーツイベントは疲れのため不調ではあった。しかし「多国籍合宿」の継続への意義は多くの参加者に確認され、その後の組織的、継続的なつながりの輪へと広がっていった。



07年 多国籍合宿「アイスブレイキング」

以上のように、第一回多国籍合宿は主催者側の意図を超えて大きな成果を生み出し、その継続と発展への意思は第二回から第七回まで持続されてきた。参加者数は第一回が約100名、第二回（於 県立青少年研修センター）・第三回（於 国立大隅青少年自然の家）が約300名、第四回（於 国立大隅青少年自然の家）が約400名、第五回（於 国立大隅青少年自然の家）に450名に達し宿泊施設の限界となった。第六回は前回450名に達した多国籍合宿の運営の効率化をめぐる日本人を中心とする運営方針が目立ち、外国人とともにを行い、ともに学びあうという多国籍合宿の基本理念に疑念が生じた。6月の予定を中止し、10月に250名の規模で行われた（於 鹿児島市立青少年センター）。これは多国籍合宿の原点を問い直す機会でもあった。第七回は07年6月15・16日に320名の規模で行われた（於 国立大隅青少年自然の家）。鹿児島大学の麻疹による休学のため地域への広報を自粛したことが残念であった。

各回とも留学生・日本人学生・地域住民それぞれ3分の1ずつに設定しているが、参加者増は運営の困難さに直結する。第七回では中心スタッフ約30名、当日運営スタッフが約80

名、17の分科会と3つの全体会が用意されたが、内容の精選と運営の効率化が解決課題である。また、中心スタッフに他大学学生・地域住民が増えてきたことや、高校生分科会や地域住民による分科会の増加など、地域化の前進もあった。

また第五回から全員参加による総合討論を最終日に設定し、すべての行事の総括と多国籍合宿の意義の確認を行い、今後の日常的指針にしている。毎年テーマを設定しノウハウも積み充実がはかられている。

多国籍合宿の隆盛に伴い、その人脈とノウハウとを活用して地域活動も徐々に活性化し、中身のあるものに変化してきた。今後は多国籍合宿をさらに地域が主体となったものにし、地域全体の国際化の動きと連携し、地域の活性化にどう貢献してゆくかが課題である。

現在の最大の問題点は、多国籍合宿で育ったスタッフが目覚め、留学などで海外に出たり、目標を発見して勉学や仕事に励んだり、留学生の中心メンバーが帰国したりで、常にスタッフ不足となることである。毎年新たな人材発掘や、教育と訓練を繰り返さねばならず、それに要するエネルギーは膨大であり減らない。多国籍合宿で育ったスタッフが戻ってくるには10年ぐらいはかかるのだろうと楽観し、その間を持ちこたえるためのノウハウの蓄積と伝達が可能な地域住民との連携と組織化が急務である。そのためにも、生涯学習教育研究センターとの連携が望まれる。

多国籍合宿の多様性をご理解いただくため、05年の各分科会のテーマを以下に紹介する。

- | |
|--|
| ①バングラデシュについて ②イスラム経済体制 ③中国茶文化 ④中国悠々紀行 ⑤韓国の記念日と伝統的な遊び ⑥日本から見るベトナムの謎 ⑦食から考える国際理解 ⑧南アメリカダンス ⑨茶道に親しもう ⑩合コン ⑪インド洋津波被災者支援活動を一緒に考えよう ⑫アフリカ ⑬ラテンアメリカ ⑭インドネシアの紹介 ⑮タンザニア ⑯宗教と人間精神 ⑰モンゴリアンと草原狼 ⑱日本文化を体験しよう ⑲ロシアについての紹介 ⑳ランゲージマーケット ㉑エイサー ㉒私の国は豊かな国？それとも貧しい国？その十年後は？ |
|--|

(3)「カントリー・トーク」について

留学生は日本社会への適応の難しさだけでなく、留学生間にも互いの国への無理解があり、その無理解ゆえにトラブルがしばしば起こった。留学生間の溝を埋めるために、留学生による留学生のための、「カントリー・トーク」と称する国別紹介の集いを鹿児島大学国際交流会館（留学生

宿舎)で開催していた。

多国籍合宿を契機に、このカントリー・トークに留学生のみならず、日本人教職員・学生及び地域住民に参加してもらうことの必要性があらためて認識された。留学生に日本人に向けて発信したいことがあるのは当然のことである。多国籍合宿が留学生に、日本人へ働きかけることの意義と可能性とやり方を気づかせることになったのである。

その後、カントリー・トークは原則として毎月の公開講座となり、日本人教職員・学生・地域住民を招き、国別紹介と討論集会を開催し、現在も継続されて毎回盛況である。

2001年10月のパキスタンのカントリー・トークでは参加者が60名を超え、当時話題のタリバンをめぐる説明後の討論が盛り上がり、参加した日本人や各国聴衆の興奮を鎮めるのに司会者は苦勞をしていた。それらの討論や興奮した発言の鎮め方にも、お国柄により主張と表現とやり方が異なり、異文化交流の臨場感が殊に興味深かった。

また、2007年7月のバングラデシュのカントリー・トークでは、ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス氏の少額融資銀行による貧者への貸し付けの歴史的意義をテーマに行われ、100名を超える参加者を集めた。このテーマは6月に行われた多国籍合宿の分科会テーマでもあり、そこで積んだノウハウがバージョンアップして展開された。多国籍合宿とカントリー・トークは連動しているのである。

カントリー・トークには多様な発想の違いが引き起こす生の意見の交流があり、日本人にとって未体験のものが多く、初めて聞く意見に目を開かれることも多い。そのような現場に立会うことは、きれいごとで表面的に流れがちな国際交流に新しい息吹を与え、平和共存への深い理解を促すこととなる。切実な思いは個人や国籍を超えて共感を生む。カントリー・トークには今までにない独創的な宝が埋まっており、大切に育ててゆきたいものがある。

カントリー・トークの面白さを広く共有し地域化するために、これまでの資料や映像を基にして各国紹介の基礎教材資料を作成しようと計画している。地域の小中高校などへよく留学生が国際理解教育の一助に招待されるが、国と自己紹介だけで与えられた時間が終わってしまうことが繰り返されてきた。この各国紹介の資料で各学校の先生に事前に生徒向けに授業等を行っていただき、その後に留学生が行くようにすれば、少し内容のあるものにするこもできよう。40数カ国の鹿児島大学留学生が国別紹介の資料を充実させ使用に耐えるものにしていくことにより、先生方

の国際理解教育推進への意欲を高め、学校と生徒の国際理解教育推進の一助となればと期待している。

生涯学習教育研究センターに活用できるものがカントリー・トークにはたくさんありそうである。



07年 多国籍合宿分科会風景

(4)まとめ

多国籍合宿を契機に、「日本人学生によるサポート組織の立ち上げ」をはじめ、多くの取り組みや現象が起こっているが、いずれもた易い道ではなく、放っておけば消滅する危険をいつも抱えている。残念ながら大学にはそれらを支える組織も人材も予算も不十分である。こうした中でいったい何ができ何をせねばならないかを的確に判断し行動せねばならない。魂の通った国際交流は口で言うほど簡単ではないのである。人材を確保し、強い意思を持続するエネルギーを常に補給せねばならないのである。しかし、そのエネルギーは留学生と学生と地域とに確実に存在しているということを確認させていただいた。

国際交流活動は留学生や外国人のサポート活動からはじまり、それを通じて異文化交流の持つ力を知ることとなる。そうして外国人から学ぶ姿勢が自然に生み出され、学ぶ面白さに気づけば、自ら動き始めるのである。義務感や使命感のみでは、人は持続することはできないのである。

多国籍合宿は日本人教育に大きく貢献してきたが、地域化はまだ不十分である。生涯学習教育研究センターとの連携により、新たな地域化への展開が望まれている。

(参考文献 『多国籍合宿報告書2001～2002』2003年、『多国籍合宿報告書2003～2004』2004年、『多国籍合宿報告書2005』2006年、以上、鹿児島大学留学生センター

「留学生・日本人学生・地域社会三者間異文化交流の活性化について」『留学生交流推進会議参考資料集』平成17年文部科学省高等教育局学生支援課)